

現代の ことば



ひろせ こうじろう
広瀬 浩二郎

4月から福山雅治さんが全盲の捜査官を演じるテレビドラマ「ラストマン」が始まった。こんなカッコいい視覚障害者なんていないぞ」と時々突っ込みを入れた。毎週の放送を楽しんでいる。福山さん演じる主人公は、できないことは素直に認め、健常者のサポートを受けている点に好感が持てる。最新の通信技術をつル活用し、視覚的な情報を得る一方、嗅覚や聴覚を駆使して、健常者が見落とし、見過しがちな事実を「発見」する。弱さと強さの両面を持つヒーローがどんな難事件に挑むのか、引き続き注目したい。

全盲の捜査官の活躍をテレビでみながら、こんなことを考えた。障害者にとって、「健常者と同じことができない」と「健常者とは違う特性がある」のどちらが大切なのか。全盲の捜査官は機器や人的サポートにより、「同」を可能としている。他方、捜査に当たっては「違」の部分で強みを発揮する。同と違が無理なく融合している点がこのドラマのおもしろいところなのかもしれない。

「違」・「同」を移動する

いる。とはいえ、視覚障害者は圧倒的なマイノリティーである。健常者に囲まれて暮らしている、否応なく多数派に合わせなければならぬ場面も多い。同と違の間で揺れ動きながら生きていくのが障害者の実像だろう。

先日、自宅のパソコンが急に動かなくなった。パソコンが使えないだけで不安になる。この焦燥感は何なのか。障害者にとって、パソコンは単に生活を豊かにする道具ではない。僕が高校生の時、パソコンに音声装置をつないで、初めて漢字かな交じり文を書いた。あれから40年。今では、健常者と同じようなスピード、精度で全盲者が文書を作成できる。僕は日々大量のメールを処理しているが、やり取りする相手の9割以上は点字を知らない健常者である。パソコンの普及によりバリアフリーが実現し、障害者の就労の可能性が広がったのは間違いない。

僕が初の全盲学生として京都大学に入学したのは1987年である。当時、多くのマスコミの取材を受けた。自分のことが書かれた記事を読んで、僕は違和感を抱いた。「過大評価でも過小評価でもなく、等身大の障害者の姿を伝えてほしい」。青年期の僕は「同」へのこだわりが強くなり、少し突っ張って生きていたように思う。

50歳を過ぎた今、僕は「違」を意識する機会が増え、「見えない」の「い」で「あ」の「あ」を模索して